

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：37702

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04547

研究課題名（和文）薩摩藩の都市景観に表れた京都文化の影響

研究課題名（英文）Influence of the Culture of Kyoto on the Urban Landscape of Samurai Districts in the Satsuma Domain

研究代表者

河原 洋子（KAWAHARA, Yoko）

第一工業大学・工学部・教授

研究者番号：50618684

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000 円

研究成果の概要（和文）：薩摩藩に100箇所以上点在した麓（ふもと）と呼ばれた今でも特徴ある景観が残る武家集住地についての研究である。薩摩藩の礎を築いた島津家16代当主・島津義久と当時の都・京都に着目した文献調査、現地調査を行い、研究集会を開催した。義久の京都での経験を明らかにし、京都から帰国して行った国分の都市建設に影響を与えたことを述べた。そこから他の麓における京都との関わりについて検討し、麓を全体的につなぐ考え方を見出すことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、薩摩藩の麓について既往の研究分野の立場・方法に限らず検討を行い、固定化された地域振興の素材としての麓のストーリーを広げている。同時に、16世紀末頃の京都に対する周辺地としての南九州の一面を明らかにしている。またシンポジウムでは、麓の活用として、伝統的建造物群保存地区等ではないかつて麓であった場所を取り込み、これまで個々に活動していた麓地区が連携することの必要性と、それぞれをつなぐことのできる京都というテーマが提案された。

研究成果の概要（英文）：This is the study on samurai districts called Fumoto, which were placed on more than one hundred sites in the Satsuma domain and have characteristic landscapes as samurai's places of residence even now. On site and documentation surveys which focused on Yoshihisa Shimazu, the 16th head of the Shimazu clan, who had laid the foundation for the Satsuma domain, and Kyoto, the capital of Japan at his time, were carried out. The open workshop and symposium concerning the subject of this study were held. The Yoshihisa's experience in Kyoto became clear; it was suggested that his experience in Kyoto had influenced the town construction in Kokubu, which he had done after coming back to his territory from Kyoto. And then, other districts of Fumoto were examined in relation to Kyoto. This study also intended to find the idea to connect each Fumoto to the whole.

研究分野：文化遺産保存、建築史・意匠、建築学

キーワード：薩摩藩 麓 島津義久 京都文化 日本近世都市 景観・歴史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本近世の都市について、建築学の研究方法を用いつつ、関連する歴史の流れの中から独自の着眼点と仮説を提示することにより進めていく事例研究である。

研究対象地である薩摩藩（鹿児島県と鹿児島県に隣接する宮崎県南部の一部）は、江戸時代日本の最南端にあり、全域を網羅するように 100 箇所以上の麓（ふもと）と呼ばれた武家集住地が点在していた。麓を中心とした地域は、藩主の居城であった屋形造りの鹿児島城に対し外城（とじょう）と称され、1780 年より郷と改められた。薩摩藩における麓の存在は、幕末の薩摩藩人口の 3 割程を士族が占めた要因であった。このような都市システムは全国的にも類を見ない。

また麓は、都市景観としても優れたものになっている。鹿児島県に所在する重要伝統的建造物群保存地区（知覧、出水、入来、加世田）は全て麓の跡である。これら保存地区でなくても、程度に差はあるが、江戸時代の道の位置や伝統的な石垣や武家門等が残り、麓の痕跡を確認できる場所は多い。

このように麓は近世日本の多様性を示し、石垣や武家門、中心部に当時の役場であった御飯屋があるなどの共通点は、現在の行政区画の枠を取り払い、かつての薩摩藩の領域を一体として認識させる概念になろう。それは広域な観光ルートや地域連携を生み出す可能性を持つ。

しかし、建築・都市分野の麓についての先行研究は、保存地区など特定の範囲にとどまり、内容は保存地区への認定を目的としたものが多い。また、麓は防衛の要所であったため、町割りの方法など直接都市づくりについて述べられた史料は先行研究でも見られない。

一方、2016 年文化庁の文化審議会による「文化芸術立国の実現を加速する文化政策」の答申には、「文化財等を地域固有のストーリーも加味しつつ総合的な活用を図る」ことが記され、これまで以上に観光活用や地域興しとしてのストーリーづくりが求められている。

観光活用に適している近世の都市の古い建物としては、まず町屋が挙げられるが、薩摩藩は商業の発展を規制したため、一部の麓には商店がある野町と呼ばれた小規模なエリアはあったものの、現存する伝統的な町屋建築は数える程しかない。ストーリーを見出すことや史料の研究も十分とは言えず、地域を興す文化資源としての波及効果も局所的である。このような中で、麓のシステムの特徴を活かした活用のためには、直接的に建築・都市に関する内容から範囲を広げたストーリーづくりが必要である。

そこで本研究では、近世初めに薩摩藩の礎を築いたとされる島津家 16 代当主島津義久（1533-1611）が晩年に移住した国分（鹿児島県霧島市）における都市づくりを取り上げる。

義久は、関ヶ原の戦いで敗者側に加担した島津家にあつて、徳川家康への対応と人脈により領地を守りぬいた人物である。また、義久が家臣に言ったと記録されている「城はいらぬ者也、尤堀堀等は無之候とも事かかぬ也、土程よき堀は無之候」（『薩藩旧伝集』）という話は、薩摩藩の城が簡素である理由にされている。城の在り方は都市づくりに影響する。義久は没後も都市づくりに影響を与えた人物であったと言え、その義久がつくり、自ら居住した国分は、薩摩藩の都市の研究としても重要である。

義久の後半生を文献等で確認すると、1566 年に父貴久より家督を譲られ、九州南部の三州（薩摩・大隅・日向）、続いて九州の大半を制圧したとされるが、1587 年薩摩の川内にて遠征軍を率いた豊臣秀吉に降伏した。そして秀吉により島津の家臣の所替えや義久とその弟義弘に居城の移動が命じられ、1595 年義久は鹿児島の内城から薩摩半島を鹿児島湾沿いに北上した浜の市近くの富隈城に移った。更に 1604 年富隈城から 4 km ほど北東の国分に移り、義久はそこで生涯を終えた。国分では、中世の山城を詰めの城とし、山の裾野に居館を設け、その南面には家臣の屋敷等を配置した。国分の町割りは、麓の中でも最も整然とした碁盤割りの一つである。

また義久には、摂関家の一つで、江戸時代に島津家が縁戚関係を結ぶことになる近衛家の当主親子との交流が、薩摩の地で二つの時期に起こっている。まず、織田信長の要請を受けて近衛前久が 1575 年九州に来訪し各地を回り、和歌を愛好した義久は前久より古今伝授された。そして、のちに寛永の三筆の一人となる近衛信尹が、1594 年秀吉の命令により薩摩半島の先端にある坊津に配流され、2 年間程を薩摩で過ごし、帰路の途中富隈城等を訪れ義久と共に能や歌会を楽しんだ。義久はその数年後には国分への移住を準備しており、1604 年には京都に家臣を行かせ、陰陽博士のところで国分の地相を尋ねさせた。

以上が一般的に知られている主な出来事であるが、本研究では、前の段落で挙げた前久との 1575 年頃と信尹との 1594 年頃の間、義久はたびたび上洛し、時には秀吉の人質として、京都の伏見にあった島津邸等に滞在していたことに着目する。薩摩において文化を介した特別な時間を共に過ごしたのだから、京都でも両家には親しい往来があったと考えられる。そして、義久が富隈城で詠んだいろは歌の中の一つ、「みる事も又きくことも耳と目に、とまらぬ人やたはけなるらむ」（『旧記雑録』）にも着目させられる。この歌から読み取ることのできる義久の人物は、上洛においても、京都のまちを積極的に見聞きし、国分の都市づくりに活かしたと推測される。しかし、京都との関係性やこのような時期に着目した先行研究は知らない。都の人々による薩摩藩について記された史料の研究も十分ではない。

貴族による日常の記録は他の身分と比較し特に多く残されている。近衛家の記録など島津家や薩摩藩を外から見た史料も研究対象とし、都市づくりについて直接述べた内容から、義久らの暮らしや心情まで範囲を広げることにより都市づくりの背景や国分のまちの特徴を明らかにでき、これまでになく着想によるストーリーを導けると考えた。

また、国分麓は小高い山々に囲まれた平野にあり、近世中頃までは近くに大津川が流れていた。

国分の土地は、義久が国分に移る前に住んでいた海辺の富隈城と比較し、盆地にある都の景観に似ており、京都を思う心情があったとも推測できる。国分の都市の特徴は景観に表れ、それは京都文化の影響を受けており、他の麓にも類似する特徴が見られると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、薩摩藩に100箇所以上点在した麓（ふもと）と呼ばれた武家集住地の都市景観の様相を、当時の都・京都とのつながりに着目して再構築しようとするものである。島津義久の国分における都市づくりを取り上げ、義久が影響を受けた京都文化との関連性を示す史料を研究対象に加えることにより、麓の成立を日本の文脈に位置づける。更にそこでの都市景観と他の麓の類似性等を明らかにし、麓を全体的につなぐストーリーとして見出すまでを目的とする。

3. 研究の方法

本研究ではまず、近世初め島津義久による国分の都市づくりの背景と計画方法を、義久と当時の都であった京都とのつながりに着目した文献調査と現地調査により明らかにする。

文献調査としては、関連する史料を収集し、都市づくりや義久らが京都で見聞きしたことなど京都と関連のある内容を抽出し整理する。近世の頃の島津家や所領について記した代表的な翻刻された史料には、江戸時代中期から明治初めに薩摩藩により編纂・再編された『薩藩旧伝集』・『旧記雑録』・『三国名勝図会』などがある。国分についての詳細は、義久の直臣が当時を記録した『国分諸古記』などがある。本研究ではこれらに加え、京都の人々が義久など薩摩を見たものも研究対象とする。信尹が記した『三藐院記』など近衛家の人々による記録が中心になると考えられるが、他にも義久と同時期に在京していた武将や島津家が特に信仰・庇護していた社寺に残る史料を調査する。現地調査は、文献調査の成果を参照し、国分や京都における地形等の状況の把握や記録、関係者へのヒアリングなどによる。調査で得た情報を地図に落とし込むなどして、国分の都市づくりの方法、京都との類似性等を検証する。

そして、上記の国分の研究で明らかにされる京都との関係性を踏まえ、麓全体に対する文献調査と現地調査を行い、特定の場所の調査を交えて実施する。参考文献は郷土誌や麓の町割りなどを描いた絵図が重要になる。その時に京都文化の影響を測る指標として景観が考えられる。例えば、江戸時代中期に造られたとされる知覧麓の武家屋敷の庭園は、京都の庭師によるものとも伝えられ、現在は保存地区の中で一部が継承されている。しかし、鹿児島県では京都の行事は数多く伝承されているが、景観面における京都との関係は知覧の他は特に知られておらず、本研究ではより多くの麓における京都文化の影響の再評価を試みる。

更に本研究を公表する集会を2つ開催する。研究期間の中程には、関連する研究を行う人々が議論する公開の学術研究会を開催する。鹿児島県では、近年地域住民による地元の歴史研究が多くなっているが、そこでの成果は共有されにくい。研究会はそれらの成果を広めると共に、地元ならではの発想を収集する目的がある。研究期間の終盤には、専門家の講演を中心とするシンポジウムを開催する。麓の認知度を高め、麓の存在を活用した地域振興につなげる内容を企画する。

以上により、当時の社会・文化を包含する都市景観の様相を再構築し、そこから麓の成立背景や都市構造・計画手法を明らかにする。そして、新しいストーリーの提示を試みる。

4. 研究成果

「研究の方法」で述べた文献調査、現地調査を行い、研究集会を開催した。それらの成果をまとめ考察し以下の研究成果とする。本研究着手後の令和元年、保存地区4箇所を含む11の麓が「薩摩の武士が生きた町」をストーリー名とする鹿児島県日本遺産の構成文化財に含まれ、その利活用においても、実在するまちと、武士（人）の歴史の関係がより重要になった。

（1） 義久と京都の体験について

まず、島津義久の京都での行動を確認した。義久は天正15年(1587)に剃髪して泰平寺で秀吉に降伏した後、秀吉の帰洛を迫るように鹿児島を発ち上洛した。それから約12年の間に義久は上洛帰国を繰り返し、在京した主な期間は4度あり、他にも島津家の一族や家臣が在京していた。京都方面の現地調査は、その頃の京都や大坂の状況と現状を比較・確認し、義久が訪れた場所を中心に行った。以下、各在京期間での文化や場所に関する特徴的な体験を取り上げる。

義久は最初の上洛の途中、博多で秀吉の茶会に家臣の伊集院忠棟と共に招かれた。本研究の参考文献として特に用いた『旧記雑録後編』は江戸時代後期に薩摩藩家臣の伊地知季安が、収集した文書や記録等を義久頃の島津家当主を中心に編年し書き写したものであるが、この中に本茶会についての仮名が交った記録があり、徳富蘇峰著『近世日本国民史』にも引用されている。本研究では、同書に本茶会のことを記した漢文体の記録があることに注目し、それらを比較すると、敬称の使い分け等から、後者は義久が記したものと推定された。書かれた内容は、一致することと別のところがあるが、義久は人質の立場ではあったが秀吉に丁重に扱われ、茶の湯に習熟していたことが分かり、緊張した心境と共に初めて行く京都への期待感が窺われた。茶会には現存する大名物の肩衝茶入「初花」が使われていた。義久が上洛すると、吉田兼見は義久の事を近衛前久から聞き、後には義久から祈祷を直接依頼される間柄になっている（『兼見卿記』）。

義久の2度目の在京は天正17年(1589)からで、旧記雑録には上記と同様に義久自身が訪れた場所を記録したと考えられるものが特に天正18年に多く分散しており、それらを確認すると大坂登城や伊勢参宮など京都を離れたときが何度もあり、その多忙さをぬうように10箇所以上の

京都の社寺を参詣していた。東山青蓮院では尊円親王の真筆を拝見し、西芳寺では夢窓国師の庭を見て歌を詠んだ。北野天神、清水寺、住吉大社（大坂）は複数回訪れていた。社寺以外にも、賀茂川流域や祇園、東山を興行見物や酒宴等でたびたび訪れ、前久や連歌宗匠の里村紹巴との親しい間柄が続いていた。義久は京都の土地勘を得て、地元の人々にも馴染み、多くを見聞したのである。この在京期間には、義久は秀吉の小田原攻めに甥の久保（義弘次男）を送り出し、大仏殿（方広寺）の造営のための材木調達を受けるなど難題を抱えていたが、その後の歴史を見れば比較的大事はなく、京都の都市や地理的特徴を十分に耳と目にとめることができたのである。

文禄3年(1594)、義久は3度目の上洛の途中、薩摩に配流された近衛信尹の一行と保戸（現大分県）で行き違った。信尹と義久は直接面会せずに使者を遣わし合ったが、京都にいた甥の忠恒（義弘三男、後の初代薩摩藩主島津家久）は東寺で信尹を見送っていた。秀吉は伏見城に入城、義久は肥後境の大口へ居城を移すよう秀吉から命じられたが、義久は翌年帰国し、自身で希望した鹿児島湾に面した住吉の富隈城に移った。その後、信尹は帰国することとなり、文禄5年(1596)7月に鹿児島を出船し、義久は富隈城で歌の会等を設けるなどして信尹を送別した。信尹の帰路についてはいくつかの記録が残されており、送別の会の記述も各々で若干異なる。『三藐院記』によると、信尹は和歌、能、乱舞、茶、小唄に駆り出されており、本場の芸能に地元で接するまたとない機会を島津家側は逃さなかった。能は座敷で行われ、参加者による合計20演目以上が披露され、主役の相手をするワキの僧侶が義久の御箱であった。最終日は夜や明け方まで酒宴が続く、老いも若いも次々に舞い、無礼講だったようである。義久のいろは歌には酒宴についての二首がある。「のむ酒の正躰なきもせうし哉　あまりのまぬも人のかけみち」「君をしもかろしめてさへ科なきハ　月花雪のたふふれるとき」これらの歌と信尹送別の記述で分かるように、風雅な席では遠慮ない振る舞いも許す義久の穏やかな人柄は、義久が好む京都を本場とする文化が国元で広まる土壌となり、文化を嗜むのに適した場所も広く形成されていたと思われる。

義久の最後の上洛は慶長2年(1597)、秀吉が伏見城に移ってから多くの武将が城の周囲に居を構えた。伏見城下の屋敷割が描かれた「伏見桃山御殿御城之画図」などには「島津」と書かれた区画がいくつかあるが、城に最も近い区画（島津大隅守）が義久の屋敷だったと考えられ、そこから最も離れている義弘の区画（島津兵庫頭）までは2キロ程である。これらで形成された範囲が島津家の一族や家臣にとって日常的に往来する生活圏であり、義久は自ら行った都市建設においても、まちの規模を計画する基準にしたと考えられる。また、現在の今熊野観音寺には、人質として在京していた三女の亀寿を案じて義久が建立したと考えられる大型の五輪塔がある。梵字の他に、地輪の正面に「慶長三年」及び側面に「藤原氏島津義久」の文字が刻まれているのがよく分かる。この寺は京都と伏見の屋敷を結ぶ道の途中にあり、秀吉の大仏殿や東山にも近く、義久がよく知る場所と言える。義久は自身の跡と心を京都に残した。建立されたのは慶長の役という異国の話に都が沸いていた頃かもしれない。しかし慶長3年11月中頃の撤退に伴い島津家も相当の損失を出し、12月10日に石田三成が秀吉の遺言を告げこの役は終わった。義久は慶長4年2月末に大坂を出て、3月中頃に「富隈私宅」（『旧記雑録後編三』）富隈城に戻った。

（2）義久による国分の都市建設

次に、義久が富隈城から移った国分のまちについて検討する。国分麓の絵図に描かれた道は、義久が居住した頃から江戸時代末まで大きく変わらず、現在の道路の位置とほぼ重なる。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの後は、義久が家康からの上洛の求めに病気を理由に応じないまま慶長7年に所領安堵の書状が出た。しかしその間の慶長6年夏、義久は国分で土木工事を行い「府第」を営もうとしていた（『南浦文集』国分新府記）。義久の屋形の敷地の近くには現在の伊勢神社が設けられ、慶長7年霜月の宝殿拝殿造営の棟札には「城内堅若軍勝利」・「一切障碍天然解脱」という願い事が書かれた（『国分諸古記』伊勢天照太神宮）。屋形の背後の山城の山頂には御飯屋や家臣の屋敷20区画があった（同、国府新城縄引帳）。安堵が翻され軍事的な介入を受ける可能性に対し、自ら居住し対抗する場所を準備したことになる。同年12月末、上洛した忠恒が家康に面会し安堵は定かになったが、これを機に、義久の新しい都市が建設されたのである。

その国分のまちは、南の大津川の方へ緩やかに傾斜する平地にあり、義久が見た京都や伏見のような碁盤の目状の道が掘られた約1キロ四方の範囲であった。慶長9年、義久は家臣を京都の陰陽博士のもとへ派遣し国分の吉凶を尋ねてから国分に入ったが、南浦文之は新しいまちを観て、東西に9、南北に5の道は陰陽五行をかたどると思った。また、山・川とまちの位置関係としての四神相応の方角は、首里・博多で確認すると厳密ではなく、国分では北が玄武になる組み合わせが比較的京都と一致しており、富隈城からの移転先として陰陽博士の賛同を受けやすかった要因と考えられる。翌年には500人以上の武士がおり（同、慶長十年国府衆中）、まちの範囲とこの人数からは、各々の住居の敷地は隣接し連続した町並みが形成されたと考えられる。

義久が国分のまちに建立した寺院は、祈願所の金剛寺（慶長9年、真言宗）と自身の菩提寺の龍昌寺（慶長10年、曹洞宗）の二箇所であった。それらを結ぶ約1.3キロの直線状の道の途中に、義久の屋形と聖武天皇勅旨による大隅国の国分寺の跡地が面していた。義久が都市建設を始めた時に、かつての国分寺を通ったこの道があり、それを基軸にして国分の町割り計画されたと推測できる。また、碁盤の目状の町割りの最西端は北の霧島神宮に向かっており、国分平野には古くから社寺が集中したエリアが複数点在し、義久の娘や叔父が住んだ場所も近かった。高齢で病気だった義久は、平坦で移動しやすい一族のゆかりの土地に、多数の神仏に囲まれ京都を思わせる環境を造ったのである。屋形の北手の清水（きよみず）という地名や、国分寺跡にあった観音寺など義久は言葉で京都を想起したとも思われる。屋形の近くの寺で和歌を詠み、国分煙草

の創始と言われる服部宗重との話等が伝わっている。簡素を好んだ義久であったが、屋形の建造物には、京都で見た近衛家の邸宅等の意匠をどこかに取り入れ、後の薩摩藩にも広まったと考えられ、それらの関係性については今後の課題である。また京都の影響とは、京都を取り入れることと、自国の特性に気づくことがある。義久にとっての国元らしさは桜島があり、国分からの桜島の眺めは長く住んだ鹿児島の内城に比較的近く、国分を選んだ理由の一つと思われる。

義久は大坂の陣が起こる前に没しており、国分では比較的穏やかに過ごしたと言えるが、当主になった忠恒が考えていた琉球への進攻を認めない態度を示した。そのような時の辞世の句「世中の米と水とをのミつくし、つくして後は天津大空」は様々に解釈できるだろうが、本研究からは、島津本宗家の長子としての役割を最後まで果たしたというだけでなく、京都につながり、そこから都市づくりまですることになった人生への満ち足りた心境とも感じる。

(3) 義久の都市建設から薩摩藩の麓へ

国分以外の麓の現地調査は、主に京都との関わりを文献等で確認できた場所で行った。開催した研究集会により、いくつかの麓における研究や保全活動の現状を把握し、義久の時代の特に島津家の人々の歴史は地域振興に欠かせない素材であることが改めて確認された。

義久の他に京都文化につながりのある島津家の人物を挙げると、義久の祖父日新斎がよく知られているが、他にも公家から和歌の添削を受けていた豪族や家臣がいた。父貴久は義久ら息子に若い時分から歌を詠む機会を設けた。また貴久は初代島津忠久が大坂住吉で雨の中出生した故事に因む絵が描かれた旗を作製しており、義久は在京時には住吉大社をしばしば訪れた。この旗の写は、義久の他に複数の薩摩藩主が作った。都につながる出来事は積み重なり、折々に思い出され、目に見えるようにして伝えられたのである。

一方、薩摩に下向した近衛前久は、都城北郷家とも親しい間柄であったことを窺わせる書簡を送っていた（『北郷家文書』）。出水にも数箇月滞在しており、出水領主の島津義虎が愛宕山山頂の神社に寄進したとされる三十六歌仙絵に歌を書いた。鹿児島では前久を歓迎するために催された当時既に都では行われなくなった犬追物に領内各地から島津家一族や家臣が参加した（『旧記雑録後編一』）。そして、出水麓の神社には江戸時代にも三十六歌仙絵が奉納され、犬追物は薩摩藩でも引き継がれた。前久が地方に与えた文化的な功績は知られているが、後に薩摩藩となる地域には前久の来訪を享受する文化的な素地が広くあり、義久の時代に際立った文化の種がまかれたことは重要である。他にも、多くの麓に中近世に遡る郷土の先人が都に上がったことを示す史料がある。彼らの視線が注がれたところから京都の文化の影響が浮かぶだろう。

また、亀寿は関ヶ原の戦いで帰国し、義久の没後に鹿児島から国分へ移ってからは、屋形近くの寺を遠寿寺と改名し幼少期に亡くなった母親の菩提寺とし、義久が建立した金剛寺に鰐口を寄付するなどした（『国分諸古記』）。信尹が配流された坊津に近い秋目も知行し実際に秋目に滞在し、そこにあった寺を正法寺と改名し寺禄を与えた。地元の女子を招き和歌を短冊に書き与えた話も伝わる（『三国名勝図会』）。女性であっても京都での経験があったから出来た事である。亀寿の歴史は、薩摩半島南端にある山間漁村の秋目と薩摩の京都とも言える国分をつなぐ素材になる。串木野では、天正3年(1575)に上京した様子を日記に書き残したことで知られる義久の弟家久の山城跡が地元の住民等により整備され、地域振興に利用されていた。

最後に、薩摩藩史料や先行研究では一般に麓は江戸時代の外城制度の中で説明されるが、義久と国分の都市建設から、麓の起こりと意義を再考したい。外城とは、起源は遡るが藩主の住む鹿児島城に対する外の意で、麓と仮屋により形成される範囲や機能を言う。事の始めとして用いるのは、義久が秀吉に降伏した数年前には、義久の家臣で山城を居城とした地頭が、山裾に住む自身の家臣をその場所に因んで麓の衆中と呼んでいたこととする（『上井寛兼日記』）。義久の別の家臣は、義久の代理として来る義久の弟を迎える年末年始の儀式に、御仮屋と呼ぶ場所を用意した（『旧記雑録拾遺二』、肝付氏系図文書）。関ヶ原の戦いの翌年の義久・義弘・忠恒が連署した掟書の中に、外城衆中と地頭の規律についての条項がある。一方、義久の国分の屋形背後の山城にあった家臣の屋敷の一つが、有事の時に義久が籠るためであろう御仮屋で、この御仮屋は結果的に不要だったが、仮屋という呼称は義久が山裾に住んだため麓の中心を表す場所に置き換わった。義久が亡くなった翌年に国分外城の初代の地頭が任命された（『国分諸古記』慶長十七年春より国府外城地頭ほか）。義久がいる国分を外とするのは難しいので、外城制度は義久の没後に定まったとすると年次が合う。明治時代以降、仮屋の跡地の多くが学校や役所に使用されたことから分かるように、麓の規模に関わらず仮屋跡は義久の屋形跡程度に立派である。薩摩藩の外城や麓は、それまでの言葉の習慣の上に、都市形態や社会情勢の変化に言葉で対応してきた文化的な概念なのである。また、国分小学校に移設された義久の屋敷の門と伝わる朱門は、麓跡等に残る武家門と比較すると規模や形状は大きく変わらず、薩摩藩の武家門の原型とも考えられる。そしてこの都市システムのために薩摩藩では、藩主と麓の関係を江戸幕府と諸藩に見立て、疑似的に薩摩藩を日本の中心に据えて物事を考える習慣が形成され、藩運営で諸処に問題があっても自藩の改革へは諸士の気持ちに向かわず、幕末には日本の歴史の中央へ躍り出た。武士の子孫へのヒアリングでは、麓の住民は周囲の麓に対しライバル的な感情を持っていたという。麓跡で見られる伝統的な建築や景観に、統一感と地域の特徴が併存している所以でもあろう。

本研究は、独自の着眼点と参考資料の構成により、日本の近世の都市や薩摩藩の研究を多様にする本テーマの基礎的な研究と位置づけられるが、検討しきれなかった人物や出来事、場所は少なくなく、それらを進めることは地域振興活動への利用と共に今後の課題である。また、中国大陸や琉球等との異文化交流の影響についても義久に着目した研究が考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 河原洋子	4. 巻 第32号
2. 論文標題 島津義久と京都―薩摩の麓の新しいストーリーを求めて―	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第一工業大学研究報告	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 河原洋子	4. 巻 F-2分冊
2. 論文標題 薩摩藩の都市形成と景観（2）―国分麓において石敢當に着目する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2020年度日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 935-936
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 前田美和・河原洋子	4. 巻 第59号
2. 論文標題 霧島市国分中央住宅街における現地調査―空き家対策の視点より地域の特徴を明らかにする	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 373-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 河原洋子	4. 巻 第31号
2. 論文標題 島津義久による国分の都市建設―ライフステージと信仰に着目した考察―	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第一工業大学研究報告	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 河原洋子	4. 巻 F-2分冊
2. 論文標題 薩摩藩の都市形成と景観－風水の視点より国分麓を見る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019年度日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1053-1054
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1. 著者名 岩下富美代・河原洋子	4. 巻 第58号
2. 論文標題 廃仏毀釈により廃寺となった国分龍昌寺について－寺院跡地の現地調査を中心に－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 685-688
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河原洋子
2. 発表標題 薩摩藩の都市形成と景観－風水の視点より国分麓を見る
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩下富美代・河原洋子
2. 発表標題 廃仏毀釈により廃寺となった国分龍昌寺について－寺院跡地の現地調査を中心に－
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

河原洋子編：薩摩の麓（ふもと）をどうつなぐか、伝えるか～キーワードは歴史・京都・景観～,2020（公開シンポジウム配布冊子）
河原洋子編：薩摩の麓の地元研究とその活かし方,2020（公開研究会配布冊子）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------